

# 北海道大学総合博物館所蔵の鱗翅目昆虫標本のデータベース化および種構成の分析(シャクガ科)

環境資源学専攻 生物生態・体系学講座 系統・分類学 館田 開

## 1. はじめに

北海道大学総合博物館には膨大な数の昆虫標本が所蔵されており、学術的に価値の高い標本群も多く存在する。標本群には個人や北海道大学以外の大学から寄贈されたものもある。寄贈者により科や目レベルで分類群ごとに整理されている標本群もあるが、多くは未整理で、整理済とされているものでもデータベース化されておらず、学術的に活用しにくい状況にある。分類体系の確立は、生物多様性のモニタリングおよびアセスメントの基盤となる。1993年に生物多様性条約が発効され、国際的に分類学の重要性を見直すGTI(世界分類学イニシアティブ)が推進された。GTIは既存の分類学と情報学を融合させ、生物多様性の研究を推進する動きであり、その考えに則ってGBIF(地球規模生物多様性情報ファシリティ)という生物多様性情報共有のための国際プロジェクトが設立された。しかし、現在の北海道大学の標本の状態はGTIに即しているとはいえず、また日本全体でみてもGBIFのようなデータベースに情報が登録されている標本は少ない。そこで本研究では、北海道大学総合博物館所蔵の鱗翅目シャクガ科標本を対象にGBIFのフォーマットに則ってデータベース化し、標本から得られる情報を元に種々の分析を行った。

## 2. 方法

約3000頭の標本情報をGBIFのフォーマットであるDarwin Coreにしたがって入力した。種の同定は中島(2011)等の図鑑や採集記録、記載論文の他に、Web上で個人や団体が運営しているデータベースも用いた。データの分析は今回入力した約3000頭の他に、既にデータベースに登録してある約3500頭を加えた約6500頭の標本データを使いMicrosoft Excelで行った。位置情報は、Webアプリケーション「Google マイマップ」で可視化した。

## 3. 結果と考察

日本産の標本数が最も多く、台湾、ネパール、マレーシアなど東洋区の標本がそれに次いだ。全体で9亜科348属888種が確認でき、日本産標本は既知種数の50%以上を含んでいた。また、亜科ごとに季節消長を確認したところ、アオシャク、ヒメシャク亜科は夏季に多く出現し、東洋区ではそれら2亜科が日本より比較的大きい割合を占めていた。

## 4. おわりに

本研究では北海道大学総合博物館に所蔵されているシャクガ科標本のデータベース化を行ったが、まだすべての標本について完了したわけではない。所蔵標本の利用価値を高めるために、今後更にデータベース化が行われることが望まれる。